

視点

こどもの多様性とその育ちを支える実践と “こどもがまんなか PROJECT”



玉川大学 教育学部 教授
宮崎 豊

こどもの育ちとその援助の在り方、教育に関心をもち、研究者として、また、保育者養成校の教員として実践の場に身をおかせていただくことがあります。その場で、保育者が何気なく行っている行為の根拠を探ってみたり、こどもの行為を意味付けしてみたりしつつ、保育者と語り合いを進め、多くを学ばせていただいております。特に、こどもの多様性とその育ちを見つめ、支えておられる実践には、新たなニーズに柔軟に対応されながらも、合理的配慮の視点をもった実践がなされていることに感銘を受けることがしばしばあります。

過日のことです。障がいのあるこどもを含め、多様なこどもを複数名受け入れ、その育ちを支えられている、とある私立幼稚園に伺わせていただきました。2時間弱、配慮が必要なこどもの姿と保育者のかかわりを観察させていただきました。園に一步踏み入れたときより、言葉にできない安心感、安定感に包まれました。その感覚を「この園では、特別な配慮を必要とするこどもたちも含め、みんなが、園に来たくて登園している」「安心して自分の思いで生活し、遊びや活動にも意志をもって参加することが保障されている」「どこにいてもそのこどもの思い、言動、遊びが認められている保育が営まれている」という独り言として呟いている自分がいたことを思い出します。

その日は雨天のため、ほとんどのこどもが保育室で好きな遊びに取り組んでいたのですが、保育室から離れたところで虫や水に関心をもちかかっているこども、また、保育室、ホールや廊下を次々に動いて探索しているこども、さまざまな姿がありました。しかしながら、その行動を障がいのあるがゆえの固有さとして考えるのではなく、こども自らの思いで行っていることとしてとらえられ、認められていました。みんなの遊びに関心を示すことができ

ない、みんなで経験する活動に参加できない、そのために別の場所で別のことをしているというとらえ方ではなく、それぞれのこどもの生活と遊び、学びへの挑戦がなされていることと読み取り、意味づけられているのです。そして、その様子が数日前とどのように違うのか、4月当初とは、または入園したときに比すとどのように変化しているのかを、豊かな言葉でていねいに語られていました。こどもの姿を肯定的にとらえ、その育ちをていねいに見つめられているからこそその語りなのだ学びを得ました。

さて、時間をおいて、このような専門性のある関わりをとらえ直してみると、貴連合会が早くから理念として掲げ、展開されている“こどもがまんなか PROJECT”や「生活の中の子どもの権利」の小冊子などにおいて大切にされている“子どもの権利条約”に基づく、権利と原則につながるものだとも振り返っています。こどもの声なき声にも耳を傾け、こどもの意志として受け止め、こどもがしたいことに挑戦することを保障すること、つまり“子どもの意見の尊重の原則”“参加の権利”が擁護されている実践であると認識を深めたところです。また、安心したい、満たされたい、関わってみたい、遊びたい、認められたいという育ちの欲求をもつということも観、これらの欲求の満たすことを基盤におく教育を展開するとした幼児期の学習観の源流が、これまでの幼稚園教育の実践の中にすでにあり、その証がこの事例であるとも考えました。

こども家庭庁が4月に始動し、今後、こどもに関わるさまざまな指針やこども大綱などが策定され、“こどもまんなか社会”の実現に向けた動きが加速することでしょう。これまで、先駆的に築いてきた専門的な実践の知や技術がさらに発信され、その知見が、施設類型の垣根を超え、こどもにとっての最善につながることを願っております。



最も困難で面白い課題

全日本私立幼稚園連合会
会長 田中 雅道

今年の夏は記録的な猛暑でした。過去最高の気温であるとか、記録的雨量であるという言葉が、毎日の放送で流れていたような感覚になってしまいます。二酸化炭素の排出量が減らなければ平均気温が1℃上がるということは、今までにも言われ続けていたことなのですが、そのことがどういった実感を伴うものなのか、どのような気候変動が起こるものなのか視覚的にも、体感的にも現実のものとなった夏になったと思っています。

孫の通う小学校では、中間休みの時に校庭で遊べるかどうかを、毎日、校長先生が判断して決定するという話を聞きました。体育の授業終了後、熱中症で命をなくす児童が出ている現状ですから、気温・湿度など総合的な判断の下、子どもの行動を制限しなければならないということはよく理解できます。しかし、一定の気温状況になっても校長先生の判断を待つ行動しなければならないようになっては子どもの成長が阻害されます。気温・天候などを自分で判断して行動することを決定するという、人が育っていくことにとって重要な育ちをどこで保証していくかが課題となってきました。

幼児期においても同じことが言えるのではないのでしょうか。幼児期は自分の力でできる範囲を広げ、試行錯誤をする行動を通して、自分でできる力をつけていく最も大切な時期です。このような育ちにとって最も重要な時期である幼児期に、行動の判断を誰かに仰がなければならないという生活になってしまつては、最も重要な課題である判断力を育てる機会を失ってしまう可能性が出てくるのではないかと危惧しています。かといって、現在の状況を考え

れば、子どもの行動に一定の制限を加えざるを得ないことも現実です。行動をコントロールしながら、子ども自身は自由に行動しているという感覚の中で保育ができるかが問われているように思います。

考えてみれば、この課題は幼児教育の究極の課題だと思っています。子ども自身は自由に行動していると思っている中に、その時に育ってほしい課題を盛り込み、遊びを通して課題を克服していくという保育を展開していくということは、保育の自由性を考える上で最も困難で面白い課題だと思っています。この課題に向かっていくためには、まず制限しなければならない課題を熟慮し、できるだけ守らなければならない制限を少なくしたうえで、保育者の見守りのバリアを緩く展開していくということが考えられるのではないのでしょうか。私の園でこのような話をすれば、先生から“意図はわかるけれど、理事長一回保育をしてみ”と言われると思います。難しいことはよくわかっていますが、皆さんが保育を展開するうえで、頭の片隅にこのような思考を置いて頂ければ幸いです。